

情報規格調査会会長退任にあたって

高 橋 茂†

情報処理学会は1961年以来その主要事業の一つとして、情報技術国際標準化に参画しています。25年間この事業を担当してきた規格委員会を改組して、情報規格調査会が発足したのは1986年9月でした。翌々年1月に辞任された和田初代会長の任期を含め、2期8年にわたり、会長を勤めさせて頂きました。この重任を大過なく全うすることができたのは、学会会員、規格調査会賛助会員、とりわけ調査会傘下の多くの委員会で活躍して頂いた委員各位のご協力の賜と心から感謝する次第です。

8年というのは経ってみると短かったような気がします。その間色々なことがありました。まず1987年11月、ISO（国際標準化機構）だけでなくIEC（国際電気標準会議）でも行われていた情報技術標準化の活動を、ISO/IEC傘下の一つの委員会に纏めたJTC1（Joint Technical Committee One）が発足しました。その経緯は「情報処理学会30年のあゆみ」¹⁾に述べたので省略しますが、私自身、日本代表としてこの統合に決定的な貢献をしたことを誇りに思っております。

会長就任の際の挨拶²⁾で、標準化ただ乗りと我が国が非難されないよう、情報技術国際標準化への寄与を増大する必要があることを強調しました。幸い、賛助会員各社のご支持と、委員各位のご努力により、SC（分科委員会）、WG（ワーキンググループ）などの幹事国業務の引き受け、国際レベルでの委員長、コンビーナ、幹事およびエディタの引き受け、国際会議の我が国での開催など、それぞれの面について、まだ十分とは言えないものの、我が国の国際的経済・技術レベル相応の、それほど恥かしくない貢献ができるようになったと思っております。

一方この間、我が国の提案としてSSI（システムズソフトウェアインタフェース）と呼ぶプラットフォームを標準化し、広範囲にわたる応用プログラムの可搬性を実現しようとしてきました。かつて

のチャンネルインタフェースの提案¹⁾と同じく、我が国からのシステム提案は、ともすれば疑いの目で見られます。この場合は、「日本がSSIチップを開発し、市場を独占するのではないか」と買い被られ、残念ながら提案は具体化しませんでした。しかしこれが引き金になって、オープンシステムの考え方が、単なるデータの可搬性から、プログラムの可搬性にまで広がり、OSE（オープンシステム環境）として検討が始まりました。SSIという名称は今ではSC22のタイトルに残っているだけで、いずれは消え去るでしょうが、その意図はOSEに活かされるものと期待しています。SSIの提案から廃案までの経過については、別途詳細に報告しました³⁾。

我が国の情報産業は、バブル経済の崩壊に加えて、ダウンサイジングの影響を受け、長引く不況に喘いでいます。調査会は費用の大半を賛助会費に依存していますから、大口賛助会員には、苦しくても賛助会員の崩落的退会の引き金だけは絶対に引かないようお願いしてきました⁴⁾。楽観的かもしれませんが、不況も底をついたと思われ、調査会としても経費の削減に成功していますので、見通しはむしろ明るいと思われ、情報規格調査会が有能な棟上新会長の下で、今後ますます発展されることを期待して、退任の挨拶とします。

参 考 文 献

- 1) 高橋 茂：情報技術標準化活動の軌跡，情報処理学会30年のあゆみ，情報処理学会，pp.121-152，(1990)。
- 2) 高橋 茂：情報規格調査会会長に就任して，情報処理，Vol.29, No.7, pp.662-663 (1988)。
- 3) Takahashi, S. and Tojo, A.: SSI Story. What it is, and how it was stalled and eliminated in the International Standardization arena, Computer Standards and Interfaces, 15 (1993), pp.523-538.
- 4) 高橋 茂：情報規格調査会と不況，情報処理，Vol.34, No.4, 巻頭言 (1993)。

(平成6年8月11日)

† 本会名誉会員 東京工科大学副学長

